

「非営利・協同総合研究所いのちとくらし発足にあたって」

非営利・協同セクターの拡大・強化のために

聖学院大学教授 富沢賢治

私は昨年「コミュニティ活動支援センター」というNPO法人を立ち上げて、その事務局長となった。

そのことを高柳新全日本民医連名誉会長に告げたとき、「実践は私たちにまかせておきなさい。富沢は理論活動に専念するほうがよい」というような主旨のことを言われた。そこで私も「研究所づくりも慎重に考えたほうがいいですよ」と切り返した。

おもねる研究所ではなく

私は一橋大学の経済研究所に33年間勤務した。その間、所長も経験した。現在は、協同総合研究所の副理事長もしている。また、ある公立大学の経済研究所の所長と親しいので、研究所のあり方について、よく話すことがある。したがって、社会科学系の研究所が社会的にどのように扱われるか、ある程度わかっているつもりである。

一番はっきりしていることは、往々にして社会科学系の研究所は「金食い虫」だと見なされることである。技術系の研究所とちがって、社会科学系の研究所の研究成果は、直接に関係者の役に立つことはあまりない。したがって、直接に役に立つ成果を期待している出資者は、いらいらしてくる。そのいらいらが昂じると「金食い虫」の退治にかかる。そうになると、研究所は、生き残りのために、もっぱら出資者に直接に役立つと思われる研究成果だけを出すようになる。そうになると、科学性に歪みが生じる。

私は1960年代、研究のサーベイ論文を書くために、かつてのソ連の社会科学書を数冊読む機会があったが、どれもおそろしく画一的、没个性的であり、科学書というよりはイデオロギー宣伝書の感があった。おもねる社会科学は社会科学ではない。そこで、私は期待する。非営利・協同総合研究所は「おもねる研究所」にならないでほしい。

では、どういう研究所になってほしいのか。①出資者に役立つ

研究をするのは当然である。しかし、それ以上の研究をしてほしい。
②非営利・協同セクターの研究をしてほしい。日本社会で非営利・協同セクターを拡大・強化するためにはどうしたらよいかを研究してほしい。

宿命を乗り越える配慮

非営利・協同総合研究所だから非営利・協同セクターについて研究することは当然だと思われるかもしれない。しかし、問題はそう単純ではない。私見によれば、日本社会で非営利・協同セクターを拡大・強化するためには、どのような組織であろうとも自己組織至上主義を改めなくてはならない。他の組織の利益も考慮に入れなければならない。その段階になると、研究所出資者の度量が問われることになる。度量の狭い出資者は「もっと出資者の役に立つ研究をすべきだ」と迫ってくる。

これが、私の経験法則から言える社会科学系研究所の宿命なのだ。この宿命をどう乗り越えるのか、研究所の担い手は考えなくてはならなくなる。そして、やがて苦しい立場におかれることになる。

事々左様に、研究所の場合、ロマンとソロバンは対立関係に立つことが多い。だから、当初からソロバンに配慮してほしい。

以上が、研究所に対する私の期待である。

(とみざわけんじ)